

Duogynon Oral の臨床応用に関する小検討

昭和39年4月1日受付

信州大学医学部産科婦人科学教室

(主任: 岩井正二教授)

大学院学生 飯沼博朗

大学院学生 新井富士夫

長野県厚生連佐久総合病院

(院長: 若月俊一博士)

産婦人科部長 山田貞一

Clinical Experience with Duogynon Oral tablet for
Oral Administration

Hiro Inuma and Fujio Arai

Departments of Obstetrics and Gynecology, Faculty of
Shinshu University
(Director: Dr. S. Iwai)

Teiichi Yamada

Gynecological Clinic of Saku General Hospital,
Nagano Prefecture
(Director: Dr. S. Wakatsuki)

〔I〕 緒言

近年所謂免疫学的妊娠反応が一般の関心を集めつつあるが、現在も尚實際的には基礎体温曲線の変動や、女性ホルモン剤投与による消褪性出血の有無等よりする臨床的妊娠診断法が応用されることが多い。特に Gestagen と Estrogen 合剤の投与が最も汎用され、各種製剤 (EPホルモン, 新EPホルモン等) による臨床成績が今日迄に各方面より数多く発表されている。

我々は、今回 Duogynon Oral (日独薬品) の提供を受け、妊娠診断法の応用につき臨床検討を行ったので、現在迄の成績につき報告する。尚、Duogynon Oral は一錠中に、ノルエステロンアセタート 10.0mg とエストラジオール 0.02mg を含有する錠剤である。

〔II〕 実験対象及び実験方法

対象は昭和38年10月以降、無月経を主訴として倍大、及び佐久総合病院の産婦人科外来に来院せる患者 27例全例に 1日1錠宛 2日間連続投与し、3~6日後の消褪性出血の有無につき観察し、妊娠反応、子宮内膜検査、人工妊娠中絶成績等と比較検討した。

〔III〕 臨床成績

(i) 成績概要

成績概要は、第1表に示す如くであり、本剤投与成績と他所見と一致適中と認められたもの、即ち妊娠例では出血を見ず、非妊娠では出血を来した例は、27例中例24で、その的中率は89%と高率であつた。尚消褪性出血を見た例では、出血の発来日は大多数が3日~5日であつた。

更に2~3の点につき検討すると表2以下の如くである。先づ妊娠、非妊娠例では第2表の如く、妊娠例13例、非妊娠例14例の内、適中は各々12例で両者間に全く差異は認められない。又経産別、年齢別では、第3、4表の如く、これ又特別な関係は認められなかつた。更に最終月経の初日から、本剤投与開始日迄の日数(33~95日)との関係は、第5表の如くであり、妊娠例での不適中は、46日目の症例であるが、非妊娠例での2例の不適中例(24才と48才)が何れも60日以上例である事は興味深いと考えられる。

(ii) 基礎体温曲線に及ぼす影響

一部の例で投与前後の基礎体温測定を実施したが、代表的症例は第1図~第2図の如くであり、服用後、翌日から高温相を示すものが多く、症例(11)では3日目、症例(15)では2日目より消褪出血が開始している。

(iii) 副作用

我々の観察せる27例に於ては、特に投薬による特記すべき副作用は1例も認められず、又その後の月経情

第1表 成績概要

症例	年例	既往妊娠分娩		最終月経から投薬までの日数	出血	診断	適中	副作用	備考
		妊娠	分娩						
1	24	4	2	58	(-)	妊娠	(+)	(-)	人工中絶
2	28	0	0	80	(-)	妊娠	(+)	(-)	
③	48	1	1	68	(-)	非妊娠	(-)	(-)	初潮以来月経不順
4	31	2	1	73	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
5	37	4	2	68	(-)	妊娠	(+)	(-)	
6	46	8	5	76	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
7	29	0	0	33	(-)	妊娠	(+)	(-)	
8	29	1	1	86	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
9	33	5	2	49	(-)	妊娠	(+)	(-)	
10	44	3	3	83	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
11	39	1	1	59	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
⑫	24	1	0	76	(-)	非妊娠	(-)	(-)	胎状奇胎にて掻爬後無月経
13	40	7	3	49	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
14	24	3	0	76	(-)	妊娠	(+)	(-)	
15	26	0	0	34	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
16	32	1	0	49	(-)	妊娠	(+)	(-)	
17	42	5	3	41	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
18	41	4	3	39	(-)	妊娠	(+)	(-)	
⑬	27	1	1	46	(+)	妊娠	(-)	(-)	
20	22	0	0	95	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
21	25	2	1	40	(-)	妊娠	(+)	(-)	人工中絶
22	41	5	4	38	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
23	34	3	2	53	(-)	妊娠	(+)	(-)	人工中絶
24	25	0	0	45	(-)	妊娠	(+)	(-)	
25	27	2	2	51	(-)	妊娠	(+)	(-)	人工中絶
26	29	1	1	38	(+)	非妊娠	(+)	(-)	
27	26	1	1	38	(+)	非妊娠	(+)	(-)	

第2表 妊娠の有無との関係

	症例数	適中	不適中
妊娠例	13	12 (92.2%)	1 (7.8%)
非妊娠例	14	12 (85.7%)	2 (14.37%)

第3表 経産との関係

	症例数	適中	不適中
未経産	8 { 5 / 3 }	7 { 5 / 2 }	1 { 0 / 1 }
経産	16 { 8 / 8 }	14 { 7 / 7 }	2 { 1 / 1 }

(上が妊娠例, 下は非妊娠例)

第4表 年齢との関係

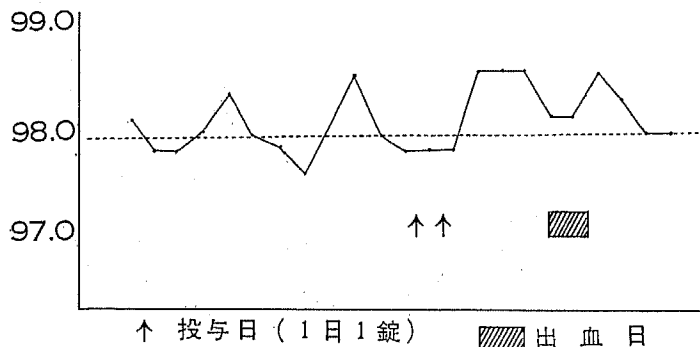
	症例数	適中	不適中
20才台	14 { 8 / 6 }	12 { 7 / 5 }	2 { 1 / 1 }
30才台	6 { 4 / 2 }	6 { 4 / 2 }	0
40才台	7 { 1 / 6 }	6 { 1 / 5 }	1 { 0 / 1 }

(上が妊娠例, 下が非妊娠例)

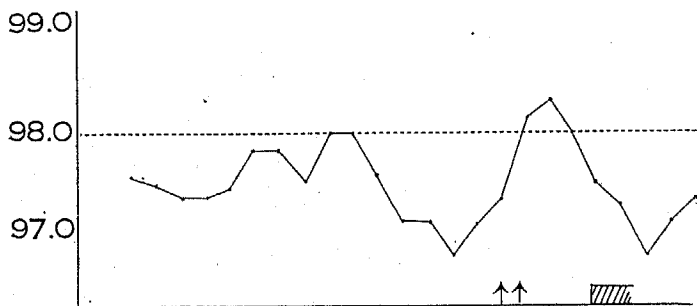
第5表 投与との関係

	40日以内	50日以内	60日以内	60日以上
妊娠例 (13例)	8/8	3/4	3/3	3/3
非妊娠例 (14例)	4/4	2/2	1/1	5/7

第1図 本剤投与とB.B.T.との関係 (症例 No.11)



第2図 本剤投与とB.B.T.との関係 (症例 No.15)



況に著変を来した例も認められなかつた。

〔IV〕考 按

近年の Steroid 化学の進歩は真に目覚ましいものがあり、年毎に臨床効果の強力な各種新製品が出現しつつある Estrogen と Gestagen の合剤に関しても、1940年 Zondeck の無月経の治療への応用以来、この面の研究が大いに進められ、1950年 Schwarz が本剤の投与による出血の有無より妊娠の早期診断が出来ると発表して以来、特に注目を集めるに至つた。本邦に於ても、各方面より詳細な追試が行なわれ、最近では錠剤の経口投与成績に関しても多くの発表がある。即ち、渡辺^⑤(EP 1日4錠3日間連続投与)、国貞^③

(EP 1日6錠2日間連続投与)、竹村^④(EP 1日4錠3日間連続投与)、福田^②(新EP 1日3錠3日間連続投与)等により、何れも高率の適中率を有し臨床的にも充分応用可能なる事が報ぜられている。我々の今回使用した Duogynon Oral でもその的中率は、妊娠、非妊娠例共に極めて良好であり、妊娠の早期診断統断統発性無月経の月経誘発等に、十分使用しうるものと思われた。その上、Duogynon Oral は従来の内服錠に比し、少量、短時日投与でよい事、又副作用も少い事等多くの長所を有し、今後期待し得る製剤と考えられ、我々も更に、月経周期の移動等の応用についても検討を進めたいと考えている。

〔V〕結 語

1錠中、ノルエチステロンアセテート10mgとエチニルエストラジオール0.02mgを含む、Duogynon Oral を、無月経患者に、1日1錠2日間連続投与し、妊娠診断、月経誘発等につき観察し、少量短時間で極めて

好成績を得る事を確認した。本剤は副作用も特記すべきものも無く、実際的にも充分使用価値あるものと考えられる。

(岩井教授の御指導、御校閲を深謝する)

主要文献

- ①赤須・他；産婦の実際， 3， 87， 1958.
- ②福田・他；産婦の世界， 12， 1097， 1960.
- ③国貞・他；産婦の世界， 8， 1040， 1956.
- ④竹村・他；産婦の世界， 8， 1283， 1956.
- ⑤渡辺・他；産婦の世界， 8， 54， 1956.